

事業報告書（令和6年度）

事業名 ～子どもを真ん中にみんなで考えて共に成長する～ 子ども支援相談会

団体名 みんなのいっば ～子どもの晴れやかな成長を支援する会～
分科会 岡山ニューロダイバーシティプロジェクト

担当者名 横西文代

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

Ⅰ．活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

特別支援教育は、「特別な子どものための教育」ではなく、すべての子どもたちの可能性を広げるために必要なものです。通常学級においても、科学的アセスメントを活用し、生徒一人ひとりに適した「個別最適な学び」を実現することが求められます。

本事業では、公立の小中学校で、科学的アセスメントを活用し、生徒一人ひとりに適した「個別最適な学び」の実現を目指します。特別支援教育の視点を通常学級にも取り入れ、指導計画の立て方や授業で活用できる支援のヒントを学び、実践的なスキルを身につけ、さらに、子どもへの適切な支援を通じて、多様性（ニューロダイバーシティ）への理解を深め、教育現場で役立つ具体的な指導方法を学ぶ機会となるように、以下の日程で開催しました。

◆ 実施日・開催場所・内容

1. 2024年7月3日（岡山市立津島小学校）

- 対象：全職員 45名
- 時間：13:30～17:00
- 内容：
 - 5校時 事例検討予定の児童の観察
 - 15:30～17:00
 - ◇ 特別支援教育の基本講義
 - ◇ 教育相談の児童を事例検討するOJT型の教員研修

2. 2024年10月15日（岡山中央中学校）

- 対象：特別支援学級 担任・支援員・管理職（12名）
- 時間：9:30～13:00
- 内容：
 - 2・3校時 教育相談予定の生徒の観察
 - 4校時 教育相談の児童を事例検討するOJT型の教員研修

3. 2025 年 2 月 13 日（岡山中央中学校）

- 対象：全教職員 40 名
- 時間：14：00～17：00
- 内容：

5 校時 事例検討予定の児童の観察

15:30～17:00

- ◇ 特別支援教育の基本講義
- ◇ 教育相談の児童を事例検討する OJT 型の教員研修

◆ 研修の目的

- 特別支援教育の理解を深める
教員が児童の特性を把握し、適切な支援を行うための知識とスキルを習得する。
- OJT 型（On the Job Training）による実践研修
実際の児童を事例に、アセスメントを行い、適切な支援策を検討する。
- 特別支援教育の手法を通常学級でも活用できるようにする
支援教育の知識をすべての子どもの学びに役立てる。

◆ 講師について

講師：山田充先生

大阪市教育委員会 インクルーシブ教育推進室・通級指導アドバイザー

講師略歴

山田先生は、特別支援教育士スーパーバイザーの資格を持ち、堺市で通常学級の教員として 17 年間、通級指導教室で 20 年間、子どもたちの指導に携わってこられました。その後、広島県廿日市（はつかいち）市教育委員会で、巡回相談や教員研修に従事され、2023 年度から現職に就かれています。また、『通級指導教室の実践 アセスメントから指導まで』など、著書も多数執筆されています。

◆ 山田充先生を招聘した理由

岡山市では、特別支援教育の専門的な知識を持ち、実践的な指導ができる専門家が不足しています。そのため、高度な専門性と教育現場での豊富な経験を兼ね備えた山田先生を研修講師としてお招きしました。

招聘の理由

1. 特別支援教育の専門知識と豊富な経験

- LD（学習障害）や ADHD の児童支援に関する深い知識と実践経験を持つ、全国的にも数少ない専門家の一人。
- 特別支援教育の支援システム構築 や 通級指導教室の改善 に積極的に

取り組まれている。

2. 教育現場に即した実践的な指導が可能

- 学校現場の児童指導経験がない大学の先生が理論的な助言をすることが多い中、山田先生は 長年の現場経験を活かし、実践的なアドバイスができる。
- 現場の教員にとって 「すぐに活用できる」 指導方法を提供できる。

3. 具体的な支援策の提案ができる

- 科学的アプローチを用いたアセスメント（評価） に基づき、個別の学習支援策を提示できる。

4. 教職員の理解を深め、支援の質を向上できる

- 理論だけでなく、実際の教育現場に即した具体例 を紹介しながら研修を実施。
- 生徒一人ひとりの可能性を引き出す方法を伝え、教職員全体の支援スキル向上に貢献。

このような理由から、本研修の講師として最適であると考え、招聘しました。

2. ESD の視点

① 事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか
アンケートでは、本研修を通じて、多くの教員が 研修で得た学びを実践していきたいという意欲を示し、以下のような気づき、意識・行動の変容が得られました。

◆ 気づきと意識の変化

✔ アセスメントの重要性の理解

➡ 子どもの行動の背景や要因を分析する力を身につけ、適切な支援策を考える視点が広がった。

✔ 特別支援教育の視点の醸成

➡ 特別支援教育は「特別な子どものため」だけでなく、すべての子どもの学びを豊かにするものであるという認識が深まった。

✔ 事例を通じた学びの効果

➡ 身近な児童のケースを扱ったことで、学びを 自分ごととして捉えやすくなった。

✔ 肯定的な指導の重要性の実感

➡ 「否定的な指導を減らし、肯定的な声掛けを増やす」ことの大切さを理解し、指導の改善につなげる意識が高まった。

✔ 通常学級における特別支援の意識向上

➡ 「支援学級が最後の砦」ではなく、通常学級の中でも支援の工夫をすることが大切だと考えるようになった。

◆ 研修後の具体的な行動の変化

💡 子どもの行動を温かい視点で見る

➡ 「この子の行動の背景には何があるのか？」と考え、気持ちに寄り添った対応を心がけるようになった。

💡 アセスメントを意識的に取り入れる

➡ 「まずは何につまずいているのかを分析し、適切な支援方法を考える」という視点を持つようになった。

💡 褒めることを意識して指導する

➡ 「できたことをしっかり言葉で伝え、自信を持たせる」という意識が高まった。

💡 学級経営の工夫（例：片付けタイムの導入）

➡ 「教えて → やらせて → ほめる」の流れを意識し、子どもに成功体験を積ませる工夫を行うようになった。

本研修を通じて、アセスメントの視点を持ち、子ども一人ひとりの特性を理解することの重要性が広まり、特別支援教育の視点を通常学級にも活かす意識が向上しました。今後も、学びを継続し、より良い教育環境の構築に取り組んでいくことが求められます。

② どのように学び合いを取り入れたか

本事業では、専門家を招き、支援が必要な子どもを中心に据えた学びの場（OJT 型の事例検討）を設けました。教員は、目の前の困っている子どもを通じて、専門家のアセスメントを受けながら、一人ひとりの多様性（ニューロダイバーシティ）を学び、子どもの現状を正しく理解し、適切な支援方法を身につけることを大切にしました。

この取り組みにより、学校での支援に一貫性が生まれ、子どもにとってより適切なサポートが可能となりました。また、専門家によるアセスメントを通じて、子ども自身も「自分に合った学び方がある」ことを知り、自信を持って学習に取り組める環境を整えることができました。

さらに、多様性を尊重しながら支援する視点が深まり、教員も共に学ぶことで、支援の質を向上させることができました。このように、実践的な学びを重視した研修形式は、非常に効果が高く、参加者の満足度も高い結果となりました。

《保護者や外部関係者の参加について》

昨年度の事業では、保護者や外部の先生を含め、子どもに関わる関係者も一緒に参加したいという意見が多く寄せられました。そのため、本年度は保護者や外部関係者も含めた形での開催を希望していました。

しかし、学校側から「保護者や外部関係者がいると、学校が相談しにくい」との意見があったため、最終的に学校の意見を優先しました。これは、子どもが最も長い時間を過ごす学校での支援を充実させることが最も重要であると判断したためです。

また、中学校での開催においては、思春期の生徒が保護者を交えた相談を嫌がる場合があること、さらに今回は初回開催だったため、まずは学校内での実施を優先することが適切と判断しました。

一方で、外部からの関心も高く、教育委員会の担当課や岡山市議が研修に同席しました。また、昨年度の事業内容を報告していた岡山市教育長も、本事業の取り組みや講師の山田先生に関心を寄せ、中央中学校での研修時に視察に訪れています。

< 森山 幸治 🔍

投稿 写真 動画



森山 幸治

2月13日 · 🌐

...

大阪より特別支援教育のスペシャリストであられる山田充先生に岡山中央中学校へ授業研究、教員研修のためにお越し頂きました。自閉症やADHD、アスペルガーの特性、感覚過敏には様々であることやユニバーサルデザインとは誰にでも、合理的配慮とはその子がわかりやすくなること、などわかっているようであらためてハッとさせられること盛りだくさんな90分でした。

なぜその子が勉強が出来ないのか、なぜ嫌がっているのか、などその子にそのわけを聞いてもその子もうまく伝えることが出来ないことがある。受けとる先生にも知識がないと受け止められない。保護者だからこ

なぜその子が勉強が出来ないのか、なぜ嫌がっているのか、などその子にそのわけを聞いてもその子もうまく伝えることが出来ないことがある。受けとる先生にも知識がないと受け止められない。保護者だからこそわからないこともある。先生だけでなく保護者にとってもこうした機会はとても貴重だとあらためて思い知りました。

今年から各学校へアセスメント出来る専門家を派遣出来るよう引き続き取り組んで行きます。



③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

ニューロダイバーシティとは、「みんな違うのが当たり前」「人それぞれ」と考え、全ての人の脳や神経の違いを尊重し、共生する考え方です。そのため、子どもの学び方や必要な支援方法も100人いれば100通りあると考えます。

これまで、多くの研修や講演で支援方法の紹介が行われています。しかし、一般的な支援方法を学んでも、目の前の子どもにどのように具体的に支援をしたら良いのかが分からず、実践に結びつけることが難しいという課題がありました。

そこで本事業では、次のような工夫を行いました。

1. 実際に支援が必要な児童を事例として扱う
 - 実際の児童の状況をもとに研修を実施。
2. 専門家による具体的なアセスメントの実施、具体的支援案を指導
 - 特別支援教育に精通し、現場経験が豊富な専門家が講師を担当。
3. 即時実践できる研修内容
 - 支援の具体的な解決策や今後の見通しを明確にし、すぐに実践できる形に落とし込む。

このように、より実践的で効果的な支援方法を学べる研修を目指し、子供に関わる先生は全員研修を受けるようにし、教員同士で支援方法を共有し、学校全体での指導の質向上につなげる工夫を行いました。

目の前の子どもへの支援を通じて、多様性（ニューロダイバーシティ）を理解し、実践的なスキルを身につける機会にもなりました。子どもが適切な支援を受けることで成長し、先生も日々の指導の中で学びを深めることができました。

「科学的なアプローチ」や「実践的なコツ」を学び、現場で役立つ具体的なヒントを得ることができ、参加者からも、「すぐに試したい」「指導方法を改善するきっかけになった」との声を多くいただきました。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

岡山市立岡山中央中学校と津島小学校で実施された3つの研修は、特別支援教育の視点を通常学級にも活かし、すべての子どもに適した「個別最適な学び」を実現することを目的として開催され、以下の共通した成果が得られました。

◆ 研修の主な成果

✔ アセスメントの重要性の理解

➡ 子どもの行動の背景や要因を科学的に分析し、適切な支援策を考える力が向上。

✔ OJT型の事例検討の効果

➡ 身近な児童のケースを扱うことで、学びが「自分ごと」として捉えやすくなり、即実践につなげやすかった。

✔ 肯定的な指導の重要性の再認識

➡ 「褒める」「励ます」ことで子どもに自信を持たせることの重要性を理解し、実践意識が高まった。

✔ 「見通しを持たせる支援」の必要性の理解

➡ 子どもが安心して学べる環境づくりのために、スケジュールの明確化や予測可能な指導を工夫する意識が向上。

✔ 特別支援教育の視点の活用

➡ 「特別支援は一部の生徒のためのものではなく、すべての子どもの学びを支えるもの」であるという認識が深まった。

✔ 教員間の連携の必要性の再確認

➡ 支援方法の統一や、チームでの情報共有の重要性を認識し、実際の指導に活かそうとする動きが生まれた。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

本事業では、特別支援教育の視点の導入、アセスメントの活用、具体的な支援策の習得について学び、大きな成果が得られました。一方で、アセスメントの実践の難しさ、支援の継続、個別最適化指導の工夫などの課題も明らかになり、今後はこれらの課題に対応しながら、すべての子どもが最適な学びを得られる環境を整えることが求められます。

また、本事業を通じた学びは、岡山地域の ESD（持続可能な開発のための教育）の取り組みとも密接に関係し、「誰一人取り残さない」持続可能な社会の実現につながる重要な基盤となります。今後は、学校・地域・家庭が連携し、「学びの多様性」を尊重した教育環境を構築していくことが必要です。

1. 行政との連携強化と支援の拡充

2023 年度に助成を受け、本事業を実施することができました。その取り組みを広めるため、岡山市議会議員の小林寿雄氏のご協力のもと、昨年 5 月末に教育長、次長、部長、担当課課長らに向けたプレゼンを実施。その結果、教育長が本事業に強い関心を持ち、講師である山田充先生の取り組みを視察するため、堺市を訪問されました。

さらに、2024 年 2 月 13 日に岡山中央中学校で本事業を開催した際には、岡山市議会議員の森山幸治氏のご協力のもと、教育長と担当課の職員の方が視察に訪れ、実際の取り組みを直接ご覧いただきました。このプレゼンと視察を通じて、行政にも本事業の重要性が広く認識される機会となりました。

その結果、行政側でも特別支援教育の重要性が認識され、新たな支援策の予算確保が見込まれています。具体的には、「専門家による巡回相談（新規）」として、以下の支援が検討されています。

- ✔ 特別支援教育の専門家を学校へ派遣
- ✔ 通常学級に在籍する学習障害の児童生徒へのアセスメント実施
- ✔ 要望に応じて年間 20 回の実施

今後は、これを機に行政とのさらなる連携を強化し、持続可能な支援体制を構築するとともに、より充実した支援を提供できるよう継続的に取り組んでいきます。

2. 今後の課題

◆ アセスメントの実践と定着

学んだ知識を実際の指導に活かすため、具体的なアセスメント手法の研修や実践的なトレーニングの機会を増やすことが必要です。

◆ 専門家の不足と支援体制の強化

特別支援教育の専門家が不足しており、的確な助言を受ける機会が限られています。次世代の専門家育成や、支援体制の強化が急務です。

◆ 継続的な研修とフォローアップ

一度の研修だけでは定着が難しいため、継続的な学びの場を設け、実践報告や意見交換の機会を増やすことが重要です。

◆ 通常学級における特別支援の工夫

特別支援教育の視点を取り入れながら、学級運営と個別支援のバランスを考えた授業の工夫が求められます。

◆ 保護者との連携と情報共有

学校と家庭が一体となって支援を進められるよう、保護者向けの研修や情報提供を充実させることが必要です。

3. 教員の負担軽減と持続可能な教育環境の整備

教員アンケートでは、最も大きなストレス要因が「保護者対応」と「生徒指導」であることが明らかになりました。特に、子どもが問題を起こした際、保護者対応に追われることで精神的負担が増していることが分かりました。

「子ども支援相談会」や「専門家による巡回相談」を通じて、**学校と家庭が連携し、教員の負担を軽減する仕組みを作ること**が求められます。こうした取り組みは、**持続可能な教育環境の実現に向けた重要な施策**となります。

4. ESD を活かした今後の事業の方向性

今後の研修では、以下のテーマに重点を置き、**ESD の視点を取り入れた支援策を検討**していきます。

 アセスメントの実践的トレーニング

➡ **具体的な事例をもとに、アセスメントの手法を学び、実践力を向上させる。**

 通常学級における特別支援の工夫

➡ **多様な生徒に対応する授業の進め方や、支援方法を学ぶ。**

 特定の支援ニーズに応じた実践研修

➡ **ASD・ADHD、不登校の児童生徒への具体的な支援策を学ぶ。**

 ESD の視点を活かした学びの多様性の推進

➡ **すべての子どもが学びやすい環境をつくるため、多様性を尊重した支援のあり方を検討する。**

 保護者向けの研修・情報提供の充実

➡ **学校と家庭が協力し、継続的な支援を行うための取り組みを強化する。**

5. まとめ ～ESD を基盤とした持続可能な教育の実現へ～

本研修を通じて、アセスメントの活用、特別支援教育の視点の導入、肯定的な指導の**重要性**などを学び、**実践的な研修が指導改善に効果的であること**が明らかになりました。

また、本研修の学びは、**岡山地域の ESD の取り組みと深く結びつき、「誰一人取り残さない」持続可能な社会づくりの基盤**となります。今後は、**ESD のネットワークを活用し、学校・地域・家庭が連携して、すべての子どもが輝ける教育環境をつくること**が求められます。この取り組みを継続し、**特別支援教育の充実、専門家の育成、教員の負担軽減、学校と家庭の連携強化**を進めながら、**持続可能な社会の実現につなげて**いきます。